

喪失対象との継続的關係：形見の心的機能の検討 を通して

著者	池内 裕美
雑誌名	関西大学社会学部紀要
巻	37
号	2
ページ	53-68
発行年	2006-03-25
その他のタイトル	Continued relations with lost objects : Focusing on the psychological functions of keepsakes
URL	http://hdl.handle.net/10112/12312

喪失対象との継続的關係
—形見の心的機能の検討を通して—

池内裕美

Continued relations with lost objects:
Focusing on the psychological functions of keepsakes

IKEUCHI Hiromi

Abstract

The loss of close people and cherished possessions, familiar environments, good health, etc. are frequently experienced. This study focused on the two most important losses, that is, bereavement and separation. The main purpose of this study was to investigate: 1) After bereavement or separation, how the lost object was internalized in our minds; and 2) How keepsakes affected the recovery from grief. Three hundred and ninety-seven participants (169 males, 227 females, 1 unknown) who live in Japan were asked to complete a questionnaire by mail survey method. The following results were obtained: 1) Using the intrusive imagery scale to measure the degree of internalization of lost objects, analysis showed that the intrusive imagery could be classified into 2 sub-concepts, that is, "negative intrusive imagery" and "positive intrusive imagery." The former was regarded as "the imagery of a lost object that was formed regardless of intentions," and latter was regarded as "the imagery of a lost object that was intentionally formed." 2) More females than males significantly tended to hold keepsakes, and the reason given by almost half of the respondents was that they did not want to erase their lost objects from their mind. 3) Path-analysis conducted to investigate the psychological function of keepsakes indicated that, on one hand, keepsakes function as emotional support for people; on the other hand, it had the counter-function of hindering the recovery of people from grief.

Key words: loss, keepsake, continued relations, intrusive imagery, mourning work

抄 録

我々は人生の中で、愛する人や大切な所有物、慣れ親しんだ環境、身体の健康など、多くのものを失う。本研究では、これらの喪失の中でも最も重大な喪失、すなわち大切な人との死別や離別体験に焦点を当てた。そして1)死別・離別の後、喪失対象が残された者の心中にいかになら内在化されているのか、2)形見は喪失悲嘆からの回復にいかなる影響を及ぼしているのかの2点について検討することを主目的とした。被調査者は、全国に在住の397名（男性169名、女性227名、不明1名）であり、郵送法によって質問紙調査を行った。主な結果は以下の通りである。1)内在化の程度を測定するために「侵入心像尺度」を作成し因子分析したところ、「消極的侵入心像」と「積極的侵入心像」の2つの下位概念が見出された。前者は「自分の意思とは無関係に形成された喪失対象の心像」、後者は「自ら積極的に形成した喪失対象の心像」として捉えることができる。2)男性に比べて女性の方が形見を保持している割合が有意に高く、また全体の半数近くの方がその理由として「失った対象のことを忘れたくないから」と答えていた。3)形見の心的機能についてパス解析により検討したところ、形見には残された者の心の支えとなる反面、回復を困難にするという逆機能が存在することが確かめられた。

キーワード：喪失、形見、継続的關係、侵入心像、喪の仕事

本論文は、平成16年度学部共同研究『対人関係の光と影：「絆」の形成、拒絶、そして崩壊の社会心理学的研究』（代表 高木修先生）の一部としてなされたものである。

問 題

我々が生きていく中で最も辛くて悲しい出来事の一つに、愛する人やモノとの別れがある。これは誰しも避けることのできない体験であり、人は人生のあらゆる局面で、幾度となくこの深い悲しみを味わうことになる。それは、ある時は長年連れ添った配偶者との別れであったり、またある時は可愛がっていたペットの死であったり、あるいは老化や病によって健康な肉体を失わねばならない状況であったりと、様々な別れの場面が人生には用意されている。こうした大切な何かを失う体験を、精神分析学では「対象喪失 (object loss)」と称し、「愛情や依存の対象を、その死によって、あるいは生き別れによって失う体験」と定義されている。そしてその種類としては、近親死や失恋、住み慣れた環境や地位、さらには自分の誇りや理想、所有物などが挙げられる (小此木, 1979)。また社会心理学ではHarvey (1996) が、「対象喪失」ではなく「喪失 (loss)」として「人の資源において、重大な減少を伴う出来事」と定義し、それは死、離婚、トラウマを引き起こすような負傷、戦争、暴力、そして集団殺戮をも包含する概念と唱えている (Harvey, 2002)。

なお、喪失研究において最も中心的な課題とされてきたのが、喪失後の心理的反応の解明であり、喪の仕事 (mourning work) あるいは悲哀の過程 (mourning process) として、これまで多くの段階モデルが提唱されている。例えばその源泉ともいえる Bowlby (1961) は、母親を失った乳幼児が示す感情を観察した結果、モーニングの過程として抗議→絶望→離脱¹の3段階を見出している。またKübler-Ross (1969) は、自分自身の死の受容に関する心理的過程として、死の否認と隔離→怒り→取り引き→抑うつ→受容といった5段階モデルを、日本では松井・鈴木・堀・川上 (1996) が災害遺族への面接調査を通して、精神的打撃と麻痺に始まり希望に終わる9段階モデル²を、平山 (1997) は正常な悲哀過程として、パニックに始まり自立・立ち直りに終わる7段階モデル³をそれぞれ提唱している。なお、こうした段階説に関しては痛烈な批判もあり、例えばWortman & Silver (1989) は、

-
- 1 Bowlby (1961) は、母親を失った乳幼児が示す感情の観察を通して3段階のモーニングの過程を見出した。「抗議 (protest)」とは、対象を失ったことが信じられず、必死になって取り戻そうとする段階、「絶望 (despair)」とは、失った対象と再び結びつこうとするが、やがてそれが無駄であることを知り、激しい絶望感に襲われる段階、「離脱 (detachment)」とは、対象に興味を失って忘却したかのようになり、やがてそれに代わる新しい対象を発見し、心を再建する段階として各々規定されている。
 - 2 松井ら (1996) の提唱した9段階モデルとは、「①精神的打撃と麻痺→②精神的パニックと不安→③否認→④怒りを中心とする強烈な情動→⑤思慕と探求→⑥混乱と抑うつ→⑦死の意味の探求・死の社会化→⑧あきらめと受容→⑨希望」である。
 - 3 平山 (1997) の提唱した7段階モデルとは、「①初期 (パニック) →②第Ⅰ期 (苦悶) →③第Ⅱ期 (抑うつ) →④第Ⅲ期 (無気力) →⑤現実直視→⑥見直し→⑦自立・立ち直り」である。

全ての人が全く同じ立場で喪失を経験し処理していくと考えること自体、非現実的であるとし、また藤森（1997）もこれら心理的過程は喪失の種類や喪失状況によって異なるであろう点を指摘している（詳しくは、池内・中里・藤原（2001））。

しかし、より重大な問題点の一つに、これら段階モデルをはじめ既存の喪失研究の大半が、喪失するとその対象との関係は切れることを前提にしており、喪失後の喪失対象との関係については等閑視している点が挙げられる。この点についてHarvey, Flanary, & Morgan（1986）は、重大な喪失は決して人々の心から離れることなく、我々の気分や心理状態に影響を与え続けるのが現実であると主張している。例えば夫を亡くした妻が、『死んだ夫が悲しむ』とあって再婚を躊躇したり、重大な選択に迷った時に心の中の夫に相談したりするといった事例などが、その典型であろう。すなわち、様々な喪失体験の中でも特に強烈な悲嘆をもたらすような重大な喪失は、喪失対象との物理的な関係が終結しても心理的な関係は簡単には途絶えないのが現実であり、残された人々の日常の思考や行動面において何らかの影響を及ぼし続けると考えられる。

この点については、山本（1991）の喪失様態の4分類が有益な示唆を与えてくれる。山本（1991）は、「物理的喪失」の有無と「心理的喪失」の有無といった2軸を用いて喪失の様態を4つに区分している。このうち「物理的には不在であるが、心理的には結びつきを保っている様態」を「補償の様態（compensation）」と称し、人は喪失による外的な世界での心の痛みを緩和するために、内的な世界では対象を創造的に再生し、破壊された心と絆を修復しようとする自我の働きを持っていると主張している。しかし、この傾向が極端になると、喪失の事実を否認し、心の中に妄想-幻覚的な形で喪失対象を蘇らせることもあるという。つまり喪失対象が心の中で「ミイラ」となり、本物の内在化と対象からの離脱が出来なくなってしまう、これを特に「病理的な補償の様態」として、先の健康な補償の様態と厳密に区別している。

このように喪失対象は、その関係が終結した後も、残された者の心の中に生き続け、日常生活の端々において顔を覗かせては影響を与えていると考えられる。なお、こうした人々の心的傾向を、トラウマ研究の領域ではHorowitz（1976）が「侵入心像（intrusive imagery）」として概念化している。侵入心像とは、重大な喪失の体験後に発達したスキーマ（Schemata）のことであり、特に「自己と関連する不安を伴った出来事が、絶えず人々の思考に押し入る傾向」と規定されている（Brownlee, Leventhal, & Balaban, 1992）。上述の山本（1991）の研究でいうところの「病理的な補償の様態」に近いものと捉えることができるであろう。

本研究ではこの「侵入心像」概念を、より“喪失”といった状況に適応するように、「喪失対象が残された者の思考や行動面に侵入し続ける傾向」と規定する。そしてこの概念を拠り所として、喪失対象が我々の心的世界にどのような形で生き続け、そして日常生活の中でいかなる影響を及ぼしているのかについて検討する。

またHarvey (2002) によると「侵入心像」は、日常の様々な刺激に触発されて喪失対象を思い出すことにより、作り上げられていくという。こうした侵入心像の形成に影響する要因としては、歌の歌詞や映画の1シーンなど、様々なものが考えられるが、その一つに失った対象を具現化する遺品や思い出の品、形見といったものが挙げられよう。例えば子供を失った遺族には、その子の部屋を生前のままにし、喪失後も“故人と共に生きる”人も多い。こうした遺品や思い出の品（以下、「形見」に統一）は、残された者の心を支えるといった肯定的な機能を果たす反面、日常への再適応を妨げるといった逆機能も考えられるが、その本質は未だ明らかではない。そこで本研究では第二の目的として、形見の存在と「侵入心像」との関連を調べ、さらにそれらのモノが喪失悲嘆からの回復にいかにか肯定的、または否定的な機能を果たしているのかについても検討する。

方 法

■ 予備調査 1

- ・ 調査目的：喪失体験があり、今後の調査に協力して頂ける方の選別。
- ・ 調査方法：郵送法によるオムニバス調査。
- ・ 調査項目：①喪失体験の有無やその内容、②喪失時期、③今後の調査への協力の意志など。
- ・ 調査対象：Ipsos日本統計調査株式会社（以下、日統調）にモニター登録している2,826名を対象に調査票を配布し1,468名から返送（回収率：51.94%）。
- ・ 抽出方法：日統調の所有する「アクセスパネル」から性年代別・地域（ブロック）別に層化抽出。
- ・ 調査時期：2004年7月14日～25日

■ 予備調査 2

「死別や離別した対象が、未だに心の中に存在していると感じるとき」について、大学生男女36名を対象に自由回答にて質問紙調査を実施（実施日：2004年6月24日）。

■ 本調査

- ・ 調査方法：郵送法による質問紙調査（500円図書券同封）

・調査項目：（本報告で使用する箇所のみ抜粋）

1. 喪失体験に関する質問項目：

1) 過去の喪失体験および最も心に残る体験、2) 悲嘆からの回復の有無、3) 回復に要した期間、回復したと思える理由（自由記述）

2. 侵入心像に関する質問項目：

予備調査2をもとに新たに15項目からなる尺度を作成した。「ある特定の場所に行く
と喪失対象を思い出す」等の内容がどの程度該当するかを、「1.全くあてはまらない
～5.非常にあてはまる」の5件法で評定。

3. 形見に関する質問項目：

1) 喪失対象との関係を象徴するような思い出の品（形見）の有無、2) その内容、
3) 手放さない理由と手放さないことに関する評価、4) 処分した理由

4. デモグラフィック要因に関する質問項目：

1) 性別、2) 年齢、3) 配偶者の有無、4) 職業、5) 住居 他

・調査対象：予備調査1で郵送調査に協力してもよいと回答した1193名から437名を
有意抽出し調査票を配布。回収数397名（回収率：90.8%）

・構成：男性169名（42.57%）、女性227名（57.18%）、不明1名、
平均年齢：39.55歳（SD=13.91、年齢幅：18～65）。

・調査時期：2004年10月29日～11月14日

結 果

1. 喪失体験に関する結果：

1) 過去の喪失体験および最も心に残る体験

まず、これまでの人生においてどのような喪失体験があったのかを本調査対象者397名
に尋ねたところ（複数回答可）、合計1181個の回答が得られた（Table 1 参照）。

またこのうち最も重大と思う喪失体験について一つだけ選んで頂いたところ、1. 大切な
人との死別164名（41.3%）、2. 大切な人との離別78名（19.7%）となり、この2つで全
体の60%を超えていた（Table 2 参照）。

2) 悲嘆からの回復の有無

喪失による悲嘆からの回復の有無を尋ねたところ、397名中「ほぼ」あるいは「完全に
回復している」と答えた人は、順に171名（43.1%）、103名（25.9%）であった。なお、そ
の中で最も重大な喪失体験が「大切な人との死別・離別」とした242名（以下、死別・離

Table 1 過去の喪失体験

項目	人数
大切な人との死別	259
ペットとの死別	177
大切な人との離別	163
引越し	132
卒業	131
大切な持ち物がなくなった	89
失業	56
大切な持ち物が壊れた	50
ペットとの離別	43
身体機能を失うような病気	24
身体機能を失うような怪我	13
定年退職	12
その他	32
合計	1181

Table 2 最も重大な喪失体験

項目	人数	%
大切な人との死別	164	41.31
大切な人との離別	78	19.65
ペットとの死別	38	9.57
引越し	26	6.55
失業	15	3.78
身体機能を失うような病気	13	3.27
大切なものがなくなった	9	2.27
卒業	9	2.27
ペットとの離別	5	1.26
大切な持ち物が壊れた	4	1.01
身体機能を失うような怪我	4	1.01
定年退職	3	0.76
その他	24	6.05
無回答	5	1.26
合計	392	100.00

別体験者)においては、165名(68.2%)が「回復している」と答えていた。

3) 悲嘆からの回復に要した期間

死別・離別体験者が回復に要する期間は、平均約2.49年($SD=5.03$: 回答幅3日~45年)であった。そこで死別・離別体験とそれ以外の喪失体験とで、回復に要する期間に差があるか否かを検討したところ、死別・離別以外の喪失体験の平均は約1.91年($SD=3.43$)となり、両者に有意な差は見出されなかった($t(262)=.991, n.s.$)。

また、喪失研究ではこれまでほとんど取り上げてこられなかった「回復するとはどういうことか」についても自由回答形式で尋ねたところ、Table 3のような結果が得られた。結果を見ると、「ほとんど思い出さなくなった」ことを「回復」と見なしている人が最も

Table 3 「回復した」と思える理由

項目	人数	%
ほとんど思い出さなくなった(時間が解決)	35	22.29
前向きな気持ちになった	28	17.83
生活に新たな変化があった	20	12.74
もう戻らないと割り切ることができるようになった	19	12.10
良き思い出として受けとめられる	17	10.83
普通の生活ができるようになった	14	8.92
思い出しても以前ほど悲しくない	11	7.01
宗教のおかげで考え方が変わった	4	2.55
人に喪失体験の話ができるようになった	4	2.55
その他	5	3.18
合計	157	100.00

多く、次いで「気持ちの変化」、「生活の変化」をあげる人が多かった。

2. 侵入心像に関する結果：

まず予備調査2で「死別や離別した対象が、未だに心の中に存在していると感じるとき」について、大学生男女36名を対象に自由回答にて調査したところ、50以上の回答数が得られた。そこで筆者と調査協力者の2名で回答をカテゴリー化し、質問形式に置き換えたところ、全部で15項目からなる「侵入心像尺度」が作成された。そして死別・離別体験者242名のみを対象として因子分析したところ（主因子法、プロマックス回転）、2因子が抽出された（Table 4）。因子Iには、「ある特定のモノを見ると、喪失対象を思い出すことがある」、「歌詞を聞いたり、テレビや映画のシーンなどをみて思い出す」などの7項目が高い負荷を示し、これらは総じて何らかの刺激があつて初めて喪失対象が心中に再生される様子を意味している。したがって因子Iは「喪失対象の消極的侵入」と命名することができる（ $a = .844$ ）。一方、因子IIには「日常生活の様々な場面で、喪失対象の影響を受けている」、「喪失対象に心の中で、励まされることがある」、「何かに迷ったとき、心の中で喪失対象に問いかけることがある」などの8項目が高く負荷している。これらの項目は、喪失対象が日々の生活の中に未だ存在し続けており、喪失対象と残された者が非常に強い絆で結ばれていることを示している。したがって因子IIは「喪失対象の積極的侵入」と命名することができる（ $a = .884$ ）。

なお、本研究では「喪失対象の消極的侵入」は「刺激に触発されて、自分の意思とは無

Table 4 侵入心像尺度の因子分析結果（プロマックス回転）

項目内容	I	II
③ある特定のモノを見ると、喪失対象を思い出すことがある	.864	-.139
①歌詞を聞いたり、テレビや映画のシーンなどをみて思い出す	.740	-.108
⑬ふとした時に突然、喪失対象を思い出すことがある	.707	.006
⑥ある特定の場所に行くと、喪失対象を思い出すことがある	.608	.103
②ある特定の日になると、喪失対象を思い出すことがある	.523	.154
⑨喪失対象のことを考え始めると止まらないことがある	.495	.189
⑧ある特定の人に会うと、喪失対象を思い出すことがある	.446	.142
⑭日常生活の様々な場面で、喪失対象の影響を受けている	-.201	.882
⑤価値観や考え方において、喪失対象の影響を受けている	-.086	.794
⑩喪失対象に心の中で、励まされることがある	.025	.745
④何かに迷ったとき、心の中で喪失対象に問いかけることがある	.264	.613
⑮喪失対象との関係を思い出させるものをながめることがある	.173	.515
⑦喪失対象に、心の中で語りかけることがある	.332	.508
⑪第三者との間で、喪失対象のことを会話に出すことがある	.173	.407
⑫喪失対象は、心の中に永遠に生き続けると思う	.297	.379
因子間相関		.724
	I. 喪失対象の消極的侵入	
	II. 喪失対象の積極的侵入	

関係に喪失対象の心像が形成されること」、また「喪失対象の積極的侵入」は「自ら喪失対象に関連する刺激を求め、積極的に喪失対象の心像を形成すること」と規定する。

3. 形見に関する結果：

次に喪失対象に関する形見を手放したか否かを死別・離別体験者に尋ねたところ、保持167名(69.0%)、処分66名(27.3%)となり、約70%の人が未だ保持し続けていると答えていた。また、男女でその割合に違いがあるか否か検討したところ、男性では保持：59名(64.13%)、処分：33名(35.87%)、女性では保持：108名(76.60%)、処分：33名(23.40%)となり、女性の保持する割合が有意に高くなることを見出された($\chi^2(1)=4.26, p<.05$)。

そこで「保持」と答えた人に具体的な内容を尋ねたところ、313の回答数が得られた(Table 5 参照)。内容をみると、少数意見が目立つ中で「写真・アルバム」が109と最も多く、以下、衣類・着物：32、手紙・メール：20、時計：16、プレゼント：14、指輪などの装飾品：11と続いていた。さらに形見を手放さない理由について尋ねたところ(単一回答)、Table 6のような結果が得られた。結果をみると、半数近くの人が「失った対象のことを忘れたくない」ことを、また20%近くの人が「心の支えとなる」ことを理由に挙げていた。

なお、「形見」と「手放さない理由」とのクロス表をもとにコレスポネンス分析を行った結果、やはり“忘れたくない”、“心の支え”の周辺に多くのモノが集まっているのが分かる。

Table 5 手元に残している形見

項 目	回答数
写真・アルバム・プリクラ	109
衣類・着物	32
手紙・メール	20
時計	16
プレゼント	14
装飾品(指輪、ネックレス等)	11
失った人が作ったもの	9
カバン・財布	8
道具類	6
カセットテープ・ビデオテープ	5
本・雑誌	7
服飾品(ネクタイ、スカーフなど)	4
CD	3
お守り	3
飾り物	3
家具類	3
その他少数意見	63
合 計	313

喪失対象との継続的關係（池内）

Table 6 形見を手放さない理由

項目	人数	%
失った対象のことを忘れたくないから	76	45.51
心の支えとなっているから	33	19.76
特に深い理由はない	20	11.98
そのモノ自体が気に入っているから	9	5.39
処分する気力がないから	6	3.59
日々の生活に役立つものだから	4	2.40
失った対象が戻ってくると信じているから	2	1.20
処分するのが面倒だから	1	0.60
その他	16	9.58
合計	167	100.00

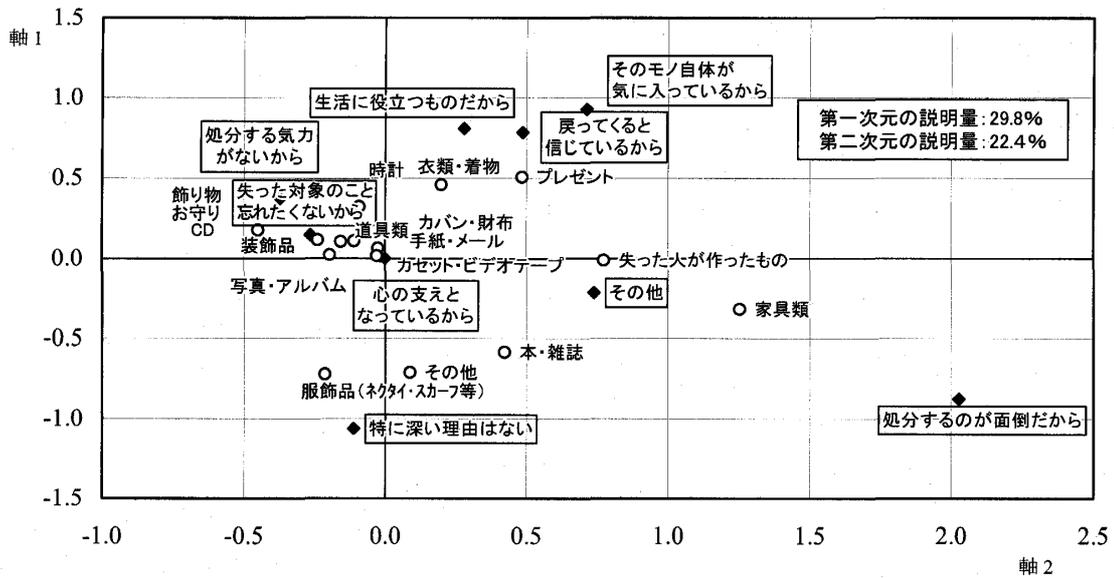


Figure1 コレスポネンス分析による形見と手放さない理由のプロット

Table 7 形見を処分した理由

項目	人数	%
自分の気持ちの整理のため	20	31.25
いつの間になくなってしまった	10	15.63
処分したことにに関して特に深い理由はない	9	14.06
失った対象のことを少しでも早く忘れたいから	6	9.38
持っていて困る	3	4.69
単に片づけがしたかったから	1	1.56
その他	15	23.44
合計	64	100.00

また形見を処分した人にその理由について尋ねたところ（単一回答）、Table 7のような結果となった。この表をみると、約30%が「自分の気持ちの整理のため」と答えている反面、「いつの間になくなってしまった」、「特に深い理由はない」という人もそれぞれ約15%いるのが分かる。

以上、形見を手放さない理由や処分した理由より、形見には喪失対象との関係を心理的に継続、あるいは終結させる機能があると推察できる。

4. 形見の保持・処分、侵入心像傾向、回復の有無の関係性

まず、性別の違いや形見の有無によって喪失対象の内在化の程度に差があるか否かを検討するために、性別と形見の保持・処分を独立変数、侵入心像尺度の2つの下位概念（消極的・積極的）の簡便的因子得点を従属変数として二要因の分散分析を行った。その結果、消極的侵入、積極的侵入ともに性別と形見の保持・処分の主効果がみられた（消極的侵入：性別 $F(1, 228)=8.92, p<.01$ 、形見 $F(1, 228)=32.59, p<.001$ 、積極的侵入：性別 $F(1, 228)=3.85, p<.05$ 、形見 $F(1, 228)=51.15, p<.001$ ）。交互作用は認められなかったので各要因の主効果に注目すると（Figure 2、Figure 3参照）、男性に比べて女性の方が、また形見を処分した人よりも保持している人の方が、喪失対象が心に深く侵入していることが分かる。

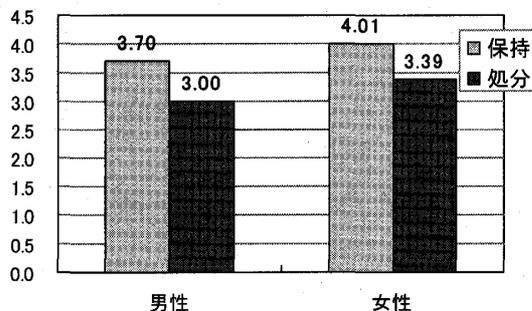


Figure 2 消極的侵入心像得点(性別×形見の有無)

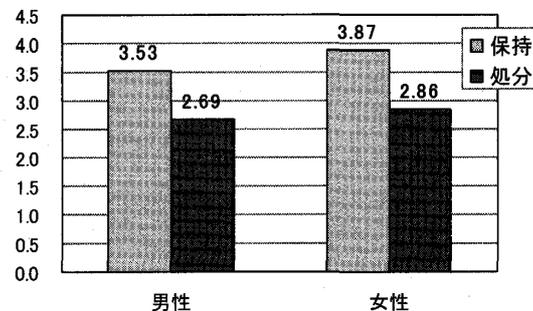


Figure 3 積極的侵入心像得点(性別×形見の有無)

そこでこうした形見の保持が、喪失からの回復に与える影響を検討するために、男女別にダミー変数を用いたパス解析を行った。その際、喪失からどれ位の期間が経過しているかといった要因も背後から影響を及ぼしていると考えられるため、「喪失からの期間」変数を因果モデルに組み込んだ。したがって実際に仮定したモデルは、まず形見の有無と喪失からの期間を説明変数、2つの侵入心像概念（簡便的因子得点により算出）をそれぞれ目的変数とする重回帰分析を行い、さらにこれら侵入心像傾向と喪失からの期間、及び形見の有無を説明変数、回復の程度を目的変数とする重回帰分析を行うというものであった。

Figure 4 と Figure 5 の結果をみると、まず形見の有無からは男女共に消極的・積極的侵

喪失対象との継続的關係（池内）

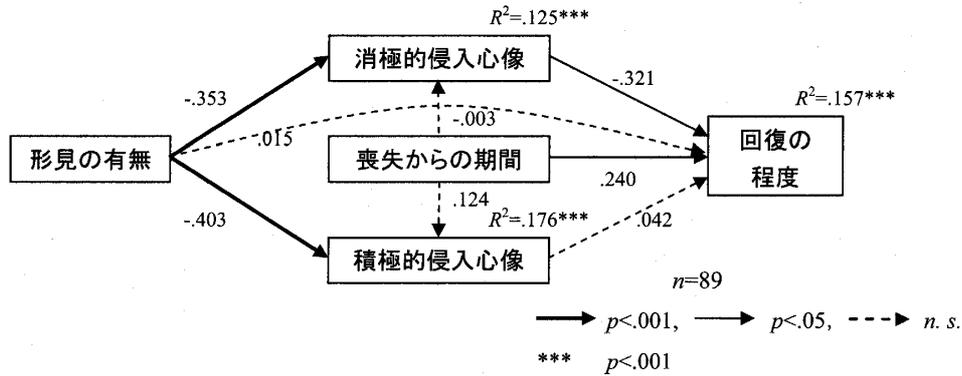


Figure 4 男性における侵入心像および回復の程度へのパスダイアグラム

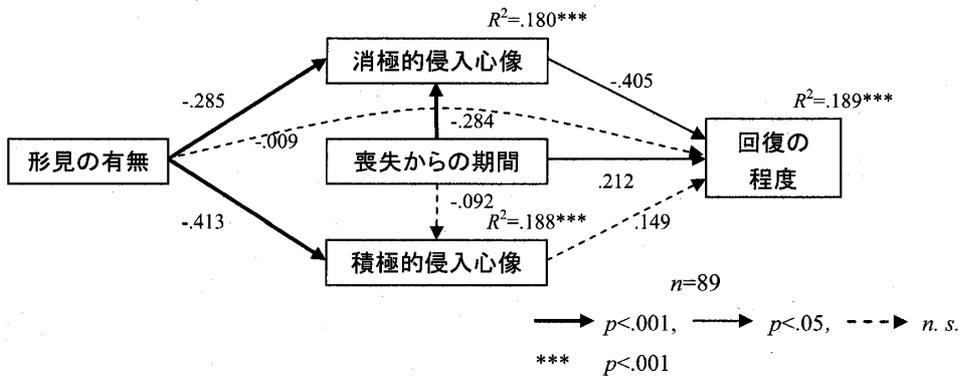


Figure 5 女性における侵入心像および回復の程度へのパスダイアグラムへのパスダイアグラム

入心像に負の有意なパスが認められた（男性：消極 $\beta = -.353$ 、積極 $\beta = -.403$ 、女性：消極 $\beta = -.285$ 、積極 $\beta = -.413$ ）。これは形見を保持している人ほど、喪失対象が残された者の心に深く侵入しており、生活の中で自分の意思とは無関係に、あるいは自ら積極的に喪失対象を思い出す傾向にあることを示している。さらに回復の程度においては、男女共に消極的侵入心像から有意な負のパスが（男性： $\beta = -.321$ 、女性： $\beta = -.405$ ）、また「喪失からの期間」から有意な正のパスがそれぞれ認められたが（男性： $\beta = .240$ 、女性： $\beta = .212$ ）、形見の有無および積極的侵入心像からのパスは有意にならなかった。また女性においてのみ、「喪失からの期間」から消極的侵入心像にむけて有意な負のパスが認められた（ $\beta = -.284$ ）。

以上の結果を総合的に解釈すると、男女共に形見の有無は喪失からの回復の程度に直接関係しているのではなく、それは消極的侵入心像を介して間接的に影響しているといえる。すなわち、単に形見を持っているだけでは回復の程度に影響することはないが、形見があることでそれが刺激となり喪失対象のことを思い出してしまうことにより、結果的に形見

の存在が回復を困難にすると考えられる。また特に女性において、「喪失からの期間」要因がそうした消極的侵入心像と回復との関係に背後から影響を及ぼしており、喪失からの経過期間が短いほど消極的侵入心像傾向が強く、あまり回復していないことが示された。

考 察

本研究では、喪失対象を物理的に喪失しても、その心理的關係は継続するという考えのもとに、喪失対象と残された者との継続的關係について、侵入心像概念および形見の存在を中心に検討した。より具体的には、喪失体験後、喪失対象が残された者の心中にいかにな在化され、日常生活にいかなる影響を及ぼしているのかを明らかにすること、また形見が喪失悲嘆からの回復にいかにか肯定的、否定的な機能を果たしているのかについて検討することの2点を目的とした。ここでは主な結果を概観しながら考察していきたい。

まずこれまで経験した最も重大な喪失として、「大切な人との死別・離別」を挙げた人は全体の約60%であり、こうした死別・離別体験者が回復に要する期間は、平均約2.49年であった。これは一般的に喪失体験（特に死別体験）に伴う悲嘆が1年から2年で回復するといわれていることや同様の調査結果にほぼ一致している（例えば平山, 1997、池内・藤原, 2002）。

なお、「回復」の意味としては、「喪失対象のことを思い出さなくなったこと」を挙げる人が最も多かった。これはWorden (1991) の悲哀の終了に関する主張を支持するものとなっている。Worden (1991) は、悲哀の仕事が終了する時期の指標として、「死者を苦悩なく思い出せるようになったとき」、「死者を思い出しても、号泣したり胸が締め付けられたりするような身体的反応がなくなったとき」といった要因を挙げている。こうした喪失からの「回復」を定義することは困難な作業であるが、実証的に喪失を研究する上では非常に重要な問題といえるであろう。この問題については、今後継続して検討していく必要があると思われる。

また、喪失対象が心の中にどのような形で内在化されているのかについて自由回答を通して検討したところ、喪失対象と残された者が非常に強い絆で結ばれていることを示唆する回答が数多く得られた。そこでこれらの回答をもとに「侵入心像尺度」を作成し因子分析したところ、「消極的侵入心像」（刺激に触発されて、自分の意思とは無関係に喪失対象の心像が形成されること）と「積極的侵入心像」（自ら喪失対象に関連する刺激を求め、積極的に喪失対象の心像を形成すること）の2つの下位概念が見出された。これは、人の自我には喪失対象を内的世界で再生し、破壊された心と絆を修復しようとする働きがあると

いう山本（1991）の主張を裏付けているといえよう。

また形見については、死別・離別体験者の約70%が未だ保持し続けており、特に男性に比べて女性の方がその割合は有意に高くなることを見出された。この男女差の源泉はどこにあるのであろうか。その一因として、そもそも形見を含めてモノそのものに対する意味づけが、男女で異なっているのではないかと考えられる。例えばDittmar（1989, 1991, 1992）は、所有物に愛着を抱く理由を男女で比較したところ、男性は道具的・実利的な機能を、女性是对人關係の象徴としての機能や情緒と関連した機能を重視することを見出している。すなわち本研究においても、女性の方が喪失対象の幻影や思い出を形見にもとめる傾向が強いため、こうした男女差が生じたものと考えられる。

さらに形見を保持している理由について尋ねたところ、半数近くの人が「失った対象のことを忘れたくないから」と答えていた。つまり、形見には喪失対象の忘却を抑制する機能があり、上述したように「回復=喪失対象を思い出さなくなったこと」であるならば、形見を保持している限り、悲嘆からの回復が困難になると考えられる。そこで、こうした視点から形見の保持が悲嘆からの回復に与える影響をパス解析により検討したところ、形見の有無→消極的侵入心像→回復の程度のみパスが有意となった。すなわち男女共に単に形見を持っているだけでは回復の程度に影響することはないが、形見があることでそれが刺激となり喪失対象のことを思い出してしまう場合、形見には回復を困難にするという機能の存在が確かめられた。またこの結果は、積極的侵入心像傾向の強い人は喪失対象をうまく内在化しており、自分にとって必要な時にのみ心の中で交流が持てる存在となっているが、消極的侵入心像傾向の強い人はうまく内在化できていないため、形見など何か刺激に触れる度に喪失対象のことを突然思い出し、強い悲嘆に陥ることを示していると考えられる。

このように形見は、残された者の心の支えとなり、喪失対象との絆を心理的に継続させる上で非常に重要な機能を果たす一方で、形見そのものが刺激となり喪失対象のことを思い出してしまうことによって、より回復を困難にするといった逆機能も併せ持つことが認められた。なお絆の継続機能に関しては、Klass, Silverman, & Nickman（1996）の主張を裏付けるものとなっている。すなわちKlassら（1996）は、大切な人を失い悲嘆状態にある人は、しばしば失った人との精神的な関係を再び構築しようとするとして述べており、Harvey（2002）はその“絆のしるし”として、自分の生活空間に置かれた写真を挙げている。また逆機能については、日航機御巣鷹山墜落事故の遺族の声を集めた文集『茜雲』（8.12連絡会，2005）の中の、形見に関する記述をみると非常に納得させられる。たとえ

ば小学生の息子を亡くした女性は、一周忌を迎える時になっても、机の上や庭に転がっているバットやボールさえ事故当時のままで保持（保存）し続け、なかなか息子の死を受け入れられない様子を訥々と綴っている。また夫を亡くしたある女性は、事故後一年以上経ってからも、“彼がいつもそばにいてくれるから”と夫の服を着続けるものの、心から楽しいと思った日は一日もないと語っている。確かにこれらの記述は、“大切な人を突然の事故で亡くす”という非常に特殊なケースに関するものではあるが、本研究で扱ったような通常の死別・離別体験においても同様の心情が生じているものと考えられる。

上記のように、形見には残された人の心を支える機能や、消極的侵入心像が形成されている場合は失った人の忘却を抑制する機能があることは分かったが、そもそもなぜこうした機能が存在するのだろうか。この点については、様々な視点から解釈することができる。たとえば精神分析学的見地からは、「移行対象」概念を用いることにより説明できる。移行対象（transitional object）とは、英国の精神科医 Winnicott（1953, 1971）が提唱した概念であり、一言でいうと「乳幼児が特別の愛着を寄せる、“自分でない”最初の所有物（例えば、テディベアや毛布）」として規定される（池内・藤原, 2004）。これら移行対象には、母子分離の状況で乳幼児の不安を減少する働きがあるが、乳幼児に限らず成人においても大切な人の喪失状況時には、形見が移行対象としての役割を果たし、精神的な支えになっていると考えられる。

また文化人類学的見地からは、「アニミズム」的世界観により解釈できるであろう。アニミズム（animism）とは、生物・非生物を問わず自然の万物すべてにおいて靈魂（anima）が存在するという信仰のことである。Beaglehole（1932）は、伝統的な社会に住む人々の魔術的でアニミズム的な習慣を調べ、アニミズム信仰のある社会では、武器や食事のための道具といった大切なモノは、他者からの汚染を避けるために一切他者には触れられず、また所有者の死後は、所有者と共に葬られるという習慣があることを見出した。すなわち形見を保持するといった習慣や心情も、モノには所有者の魂が吹き込まれているといったアニミズム的精神の一つの現れであると考えられる。

さらに社会心理学的見地からは、「拡張自己」概念を用いることによって解釈できる。拡張自己（extended self）とは、「自己の一部であると認知、同定している全てのものの集合体」（池内・藤原・土肥, 2000）であり、残された者にとって形見は失った人の一部すなわち拡張自己とみなされるがゆえに、心の支えとなったり、忘却を抑制する機能があると考えられる。こうした解釈のどれが適切かは一意に定めることは困難であるが、「形見」の心的機能に関する心理学的研究はまだ始まったばかりである。したがって今後さら

なる検討を行い、洞察を深める必要があろう。

なお、これまでの喪失研究では喪失体験者の悲哀反応の解明が中心であり、その対象との關係が喪失後どのように情緒的に変化し、生活の中で再配置されるのかといった「喪失後の継続的關係」に関する実証研究は等閑視されてきた。したがって侵入心像概念をもとに喪失後の關係性に着目した本研究は、既存の喪失研究に新たな知見を蓄積したといえよう。また同時に、社会心理学の主要テーマである「対人關係研究」において、「実存しない他者が及ぼす心理的影響」といった研究視点をもたらしたことも一つの貢献であったと思われる。しかし本研究では、死別と離別をまとめて分析しているという点や、喪失対象との關係の深さや喪失状況の違いといった点については一切ふれていないという問題点があることも否めない。したがって今後は、喪失対象との継続的關係に影響を及ぼす諸要因をより厳密に検討した上で、形見の心的機能の探求や保持することの是非の検討、そして形見の保持・処分や侵入心像傾向を組み込んだ悲嘆からの回復モデルの精緻化をさらなる研究課題としたい。

引用文献

- Beaglehole, E. 1932 *Property: A study in social psychology*. New York: Macmillan.
- Brownlee, S., Leventhal, H., & Balaban, M. T. 1992 Autonomic correlates of illness imagery. *Psychophysiology*, **29**, 142-153.
- Bowlby, J. 1961 Processes of mourning. *International Journal of Psychoanalysis*, **42**, 317-340.
- Dittmar, H. 1989 Gender identity-related meanings of personal possessions. *British Journal of Social Psychology*, **28**, 159-71.
- Dittmar, H. 1991 Meanings of material possessions as reflections of identity: gender and social-material position in society. In Rudmin, F. W. (Ed.), *To have Possessions: A Handbook on Ownership and Property. Special Issue of Journal of Social Behavior and Personality*, **6**, 165-186.
- Dittmar, H. 1992 *The social psychology of material possessions: To have is to be*. UK: Harvester Wheatsheaf, St.Martin's Press.
- 藤森和美 1997 災害被災者の精神健康と回復への援助 松井 豊（編）悲嘆の心理（pp.185-202）サイエンス社
- 8.12連絡会 2005 茜雲総集編：日航機御巢鷹山墜落事故遺族の二〇年 本の泉社
- Harvey, J. H. 1996 *Embracing their memory: Loss and the social psychology of storytelling*. Needham Heights, MA: Allyn & Bacon.
- Harvey, J. H. 2002 *Perspectives on loss and trauma: Assaults on the self*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications. (和田 実・増田匡裕編訳 2003 喪失体験とトラウマ：喪失心理学入門 北大路書房)
- Harvey, J. H., Flanary, R., & Morgan, M. 1986 Vivid memories of vivid loves gone by. *Journal of Social and Personal Relationships*, **3**, 359-373.
- 平山正実 1997 死別体験者の悲嘆について：主として文献紹介を中心に 松井 豊（編）悲嘆の心理

(pp.85-112) サイエンス社

- Horowitz, M. J. 1976 *Stress response syndromes* (2nd ed.). Northvale, NJ: Jason Aronson.
- 池内裕美・藤原武弘 2002 対象喪失による心理的過程：回復期間に影響を及ぼす諸要因の検討 日本社会心理学会第43回大会論文集, 526-527.
- 池内裕美・藤原武弘 2004 移行対象の出現・消失を規定する社会心理学的規定因の検討：生育環境と夫婦間ストレスの視点から 社会心理学研究, **19**, 184-194.
- 池内裕美・藤原武弘・土肥伊都子 2000 拡張自己の非自発的喪失：大震災による大切な所有物の喪失調査結果より 社会心理学研究, **16**, 27-38.
- 池内裕美・中里直樹・藤原武弘 2001 大学生の対象喪失：喪失感情、対処行動、性格特性の関連性の検討 関西学院大学社会学部紀要, **90**, 57-71.
- Kübler-Ross, E 1969 *On death and dying*. Macmillan Company. (川口正吉訳 1971 死ぬ瞬間 読売新聞社)
- Klass, D., Silverman, P. R., & Nickman, S. (Eds.) 1996 *Continuing bonds*. Washington, DC: Taylor & Francis.
- 松井 豊・鈴木裕久・堀 洋道・川上善郎 1996 日本における災害遺族の心理に関する研究の展望 2 聖心女子大学論叢, **87**, 41-66.
- 小此木啓吾 1979 対象喪失－悲しむということ－ 中公新書
- Winnicott, D. W. 1953 Transitional objects and transitional phenomena. *International Journal of Psychoanalysis*, **34**, 89-97.
- Winnicott, D. W. 1971 *Playing and reality*. London: Tavistock Publicated Ltd. (橋本雅雄訳 1979 遊ぶことと現実 岩崎学術出版社)
- Worden, J. W. 1991 *Grief counseling and grief therapy: A handbook for the mental health practitioner* (2nd ed.). New York: Springer. (鳴沢 実監訳 1993 グリーフカウンセリング：悲しみを癒すためのハンドブック 川島書店)
- Wortman, C. B., & Silver, R. C. 1989 The myths of coping with loss. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **57**, 349-357.
- 山本 力 1991 対象喪失の様態とその位置付け 岡山県立短期大学紀要, **34**, 1-8.

—2005.11.28受稿—